

「悲劇的なもの」と「同苦」について

—『仮面の告白』から考える—

加藤 和花

はじめに

『仮面の告白』は一九四九年七月、作者が二十四歳の時に河出書房から刊行され、主に語り手である「私」の悲劇的なものへの憧れや、性的生活史が描かれている。

幼い「私」は、グイド・レーニの「聖セバスチャン図」に性的な興奮を感じ、逞しい肉体を持つ同級生に恋をし、彼が処刑され、血を流す様を想像する。青年期の「私」は、同級生の妹・園子に惹かれ交際するが、性的な感覚は起こらず、結婚することができない、という理由のもと別れを告げる。そして、園子は別の男と結婚してしまふ。その後も園子とは何も起こらないあいまいな交際を続けながらも、ともに訪れたダンスホールで見かけた粗野な若者の肉体を見ると、彼が流血する様を想像してしまふ。私小説的であり、「私」のサディズム・マゾヒズム、同性愛的志向について書かれたものである。

佐藤氏は、『仮面の告白』について「私」の経歴や家族などの外的事実が作者のそれと一致するからといっ

て、「私」は三島由紀夫ではないし、これは「仮面」を被った「告白」だという理解は、基本的には正しい」としつつも、伝記研究から「今やここに書かれている出来事は、かなりの程度、というよりは異様なほど事実が正確に書きとめられているのではないかという予想」が成り立つという。そして私小説に代表される日本文学のこれまでの流れと比較し、「作者固有の苦悩が表現されれば、一定程度の評価が得られ、『仮面の告白』には十分その資格があった。だが、『仮面の告白』はその評価の杯に半分しか載らない。残りの半分は「仮面」の部分であり、自己批評である。（中略）自己の性志向を冷徹に徹底的に分析することで、客観性を確保し普遍性を獲得した。（中略）『仮面の告白』に書かれた性志向は、オスカー・ワイルドや谷崎潤一郎などの「悪魔主義」的な逸楽や背徳と重なっていたが、作品はこの傾向を賛美しなかった。（中略）むしろ自己嫌悪さえ感じられ、苦痛に歪んでもいる。（中略）ふてぶてしい居直りがないのである。それは三島が市民社会の一員として、「皆と同じだ」

ということに強い憧れを抱いているからだ。そこから自身の性志向への批評は生まれる。(中略) 芸術家としての特殊性に甘えず、市民としての感覚を保持する。『仮面の告白』の基盤となる価値はこういうところにある。」と評している。(佐藤秀明『三島由紀夫―悲劇への欲動―』、令和二年十月、岩波書店)

また松本氏は、「私自身の体験」を「忠実」につづつて書くことにより、明らかにあった、自分の女への性的欲望の欠落感を、性的欲望の別種の形態＝同性愛としての意志的に押し出したのである。事実認識ではなく、積極的主体的に決定したのである。そして、三島がこの長編を書いた最大の眼目が、ここにあったと思われる。」と評しており、『仮面の告白』に付されたノートの中の「この本を書くことはわたしにとつて裏返しの自殺だ。飛込自殺を映画にとつてフィルムを逆にまはすと、猛烈な速度で谷底から崖の上へ自殺者が飛び上つて生き返る。この本を書くことによつて私が試みたのは、さういふ生の回復術である」という一節について、「当時の三島にとつて、自分を同性愛者と自己決定することは、まさしく飛び込み自殺を敢行するようなものであった。しかし、そうすることによって、じつは積極的に生きようとしたのだ」と評している。(松本徹『三島由紀夫―エロスの劇―』、平成十七年五月、作品社)

このように、『仮面の告白』の、これまでの日本文学

の私小説とは異なっている点での価値への言及や、三島の性志向への自己批評、アイデンティティの確立の役割に着目する意見が多い。しかし細かく場面を見ていき、エッセイと比較することで、三島の肉体観や別の考えがわかるのではないだろうか。

今回は三島のエッセイ『私の遍歴時代』(昭和三十九年四月、講談社)にある「仮面の告白」の前半の密度と後半の荒っぽさ」という言葉を考慮し、主に前半、その中の「悲劇的なもの」という言葉について考察することとする。

一

第一章では、幼年時代の「私」の印象的な出来事や興味について書かれており、「最初の記憶」、「ふしぎな確たる影像で私を思い悩ます記憶」があるという。

それは、坂を下りてくる一人の若者であり、汚穢屋と呼ばれる糞尿汲取人の姿である。それを見た「私」は、「私が彼になりたい」という欲求、『私が彼でありたい』という欲求を感じたという。なぜかというところ「彼の職業に対して、私は何か鋭い悲哀、身を燃えようような悲哀への憧れを感じ」、「きわめて感覚的な意味での「悲劇的なもの」を、私は彼の職業から感じた」からだという。また軍隊の兵士から空の葉莢をもらうという楽しみにおいて、兵

士の汗の匂いが記憶に残っているという。「その匂いは、もちろん直ちに性的な快感に結びつくことはなしに、兵士らの運命・彼らの職業の悲劇性・彼らの死・彼らの見るべき遠い国々、そういうもののへの官能的な欲求をそれが私のうちに徐々に、そして根深く目覚めさせた」という。

また「一つの象徴のような情景」、「今の私には、幼年時そのもの」と思われる光景に出会う場面がある。祭りの神輿が「私」の家の門内に倒れ込む、という事件の場面である。

神輿が数十人の若者たちによって運ばれている光景で、「唯一つ鮮やかなものが、私を目覚かせ、切なくさせ、私の心を故しらぬ苦しみを以て充たした」という。それは「神輿の担ぎ手たちの、世にも淫らな・あからさまな陶酔の表情だった」と書かれてある。

このような「悲劇的なもの」への欲求や、神輿の若者への興味は、三島のエッセイにも出てくる。そのため、このエピソードにおける「私」は三島自身に近いものであることがわかる。

昭和四十年十一月から昭和四十三年六月に雑誌『批評』にて発表された『太陽と鉄』では、三島の幼児からある、神輿を担ぐ「彼らの目に映っているものが何だろうか」という謎が、実際に神輿を担ぐことによって解明された、とある。その解答は「彼らはただ空を見ていた」というものである。続けて「そして又、私は、その揺れうごく

青空、翼をひろげた獺猛な巨鳥のように、飛び降り又翔けのぼる青空のうちに、私が「悲劇的なもの」と久しく呼んでいたところのものの本質を見た」という。

ではその悲劇とは、何を意味しているのだろうか。

二

『仮面の告白』の中では「悲劇的なもの」については、次のように説明されている。

私の官能がそれを求めしかも私に拒まれている或る場所で、私に関係なしに行われる生活や事件、その人々、これらが私の「悲劇的なもの」の定義であり、そこから私が永遠に拒まれているという悲哀が、いつも彼ら及び彼らの生活の上に転化され夢みられて、辛うじて私は私自身の悲哀を通して、そこに与ろうとしているものらしかった。とすれば、私の感じだした「悲劇的なもの」とは、私がそこから拒まれているということの逸早い予感もたらした悲哀の、投影にすぎなかったのかもしれない。

この部分からは、「悲劇的なもの」とは、「私」が求めているにもかかわらず「そこから永遠に拒まれている」ようなものを表していることがわかる。

また悲劇の定義について、先ほどの『太陽と鉄』においても詳しく書かれてある。

私の悲劇の定義においては、その悲劇的パトス（注…ギリシャ語で普通「激情」「情熱」「情念」の意味。『新版 哲学・倫理用語辞典』思想の科学研究会編、平成十九年二月、三一書房）は、もともと平均的な感受性がある瞬間に人を寄せつけぬ特権的な崇高さを身につけるところに生れるものであり、（中略）しかもその特権的な崇高さは、厳密に一種の肉体的勇氣に基づいている必要があった。悲劇的なものの、悲壮、陶酔、明晰などの諸要素は、一定の肉体的な力を具えた平均的感性が、正に自分のために用意されたそのような特権的な瞬間に際会することから生れてくる。

このように、神輿を担ぐことによって、三島が知りえた「悲劇的なもの」の本質には、肉体的要素が必要である、ということがわかる。また「肉体的勇氣」という言葉については、同エッセイで「苦痛を引き受けるのは常に肉体的勇氣の役割」であり、「死を理解して味わおうとする嗜欲の源」と表現されている。また『肉体の学校』やエッセイの記述から、「詩人の顔と闘牛士の肉体」を持つことを、三島は理想としていることがわかった。こ

の「闘牛士」という言葉は、『太陽と鉄』においても登場する。「すぐれた肉体には悲壮なものはあるが、みじくも滑稽なものはないからである。しかし肉体を終局的に滑稽さから救うものこそ、健全強壯な肉体における死の要素であり、肉体の気品はそれによって支えなければならなかった。闘牛士のあの華美な、優雅な衣裳は、もしその職業が死と一切関わりがないものであったら、どんなに滑稽に見えることであろう。」という以上の記述からは、闘牛士の肉体には、死の要素があるからこそ、すぐれており気品がある、と読みとれる。

では『仮面の告白』での、汚穢屋の青年に感じた「彼になりたい」、「彼でありたい」という欲求はこの「悲劇的なもの」の本質である肉体的要素を彼が持っていることに對する憧れであったのではないか。三島は幼いころから病弱であり、ボディビルを「肉体的劣等感を払拭するためにはじめた運動」（『三島由紀夫スポーツ論集』佐藤秀明編、令和一年五月、岩波書店）と書いており、自身の肉体に満足していなかったことから、それは推測できる。

三

その後に肉体にまつわるものとして「集団」や「同苦」という言葉が出てくる。

私の幼時の直感、集団というものは肉体の原理にちがいないという直感は正しかった。(中略)力の行使、その疲労、その汗、その涙、その血が、神輿担ぎの等しく仰ぐ、動揺常なき神聖な青空を私の目に見せ、「私は皆と同じだ」という栄光の源をなすことに気づいたとき、すでに私は、言葉があのように私を押し込めていた個性の闘を踏み越えて、集団の意味に目ざめる日の来ることを、はるかに予見していたのかもしれない。(中略)集団こそは、言葉という媒体を終局的に拒否するところの、いうにいわれぬ「同苦」の概念にちがひなかった。(中略)言語表現は快楽や悲哀を伝達しても、苦痛を伝達することはできないからであり、快楽は観念によって容易に点火されるが、苦痛は、同一条件下に置かれた肉体だけが頷くものだからである。肉体は集団により、その同苦によって、はじめて個人によつては達しない或る肉の高い水位に達する筈であった。(中略)早春の朝またぎ、集団の一人になって、額には日の丸を染めなした鉢巻を絞め、(中略)駆けつづけていた私は、その同苦、その同じ懸声、その同じ歩調、その合唱を貫ぬいて、自分の肌に次第にじんて来る汗のように、同一性の確認に他ならぬあの「悲劇的なもの」が君臨してくるのをひしひしと感じた。(中略)「身を挺している」という感覚は、筋肉を躍

らせていた。われわれは等しく栄光と死を望んでいた。望んでいるのは私だけでなかった。

ここからは、集団における肉体的な苦痛、つまり「同苦」を分かちあうこと、「私は皆と同じ」である、「われわれ」という感覚、すなわち「同一性の確認」により、言葉や個人では行きつくことのできない領域へ、三島の欲する「悲劇的なもの」へと行きつくことができる、と三島が考えていることがわかる。加えて「等しく栄光と死を感じていた」という表現から、苦痛を引き受ける「肉体的勇氣」が条件とされる「悲劇的なもの」とは、戦争を表しているのではないか。

同エッセイでは、三島が感じた幸福についての記述がある。「私が幸福と呼ぶところのものは、もしかしたら、人が危機と呼ぶところのものと同じ地点にあるのかもしれない。言葉を介さずに私が融合し、そのことによって私が幸福を感じる世界とは、とりもなおさず、悲劇の世界であったからである。もちろんその瞬間にはまだ悲劇は成就されず、あらゆる悲劇的因子を孕み、破滅を内包し、確実に「未来」を欠いた世界。そこに住む資格を完全に取得したという喜びが、明らかに私の幸福の根拠だった。そのパスポートを言葉によってではなく、ただひたすら肉体的教養によって得たと感じるものが、私の矜りの根拠だった。」とあり、ここである「破滅を内包」

した「未来を欠いた」世界とは、戦時中の世界のことを表していると考えられる。

三島が戦争をうけて感じていたことは、昭和三十九年四月に講談社から刊行された『私の遍歴時代』というエッセイに、「戦後十七年を経たというのに、未だに私にとつて、現実が確固たるものに見えず、仮りの、一時的な姿に見えがちなもの、私の持つて生まれた性向だと言えはそれまでもだが、明日にも空襲で壊滅するかもしれず、事実、空襲のおかげで昨日在ったものは今日はないような時代の、強烈な印象は、十七年ぐらいではなかなか消えないものらしい。(中略) こういう日々に私が幸福だったことは多分確かである。(中略) こんな状態をいまになつて幸福だというのは、過去の美化のそしりを免かれまいが、それでもできるだけ正確に思い出してみても、あれだけ私が自分というものを負担に感じなかった時期は他にない。」とある。このように戦時中が幸福であつたと表現していることから、戦争における使命感や、非常事態での現実感のなさに対して幸福を感じており、終戦後においては、戦争中を想起させる鍛え上げた肉体を指すことに、幸福を感じていたのではないだろうか。

『仮面の告白』では、汚穢屋の青年に「私」は「或る「身を挺している」と謂つた感じ」をもち、「そういうものが溢れ出て五歳の私に迫り私をとりこにした」という。『太陽と鉄』では「身を挺している」という感覚は、

筋肉を躍らせていた。われわれは等しく栄光と死を望んでいた。望んでいるのは私だけでなかった。」とある。この感覚を感じている場面では、「額には日の丸を染めなした鉢巻」という表現からも、戦争を連想させる。

「私」が欲しながらも、永遠に拒まれていたもの、というのは、三島が幼少から肉体的劣等感を持つていたことを意味しており、集団における肉体的な苦痛や「われわれ」という感覚、「身を挺している」という感覚は、戦争やそれに付随する死につながつているものである、と考える。

おわりに

『仮面の告白』や『太陽と鉄』に出てくる「悲劇的なもの」というのは、三島にとつての幸福であり、「同苦」や「身を挺している」感覚というのは、戦争へとつながっている。また理想の肉体である「闘牛士の肉体」は、死の要素を兼ね備えているからすぐれているのであり、訓練によつて体を鍛え、死んでいく兵士の運命に、三島は惹かれていたのだと考えられる。

〔付記〕

本論は令和六年度別府大学文学部卒業論文の一部を掲載したものである。